

# オリンピック・パラリンピックのレガシー

—リオ 2016から  
東京 2020へ—



## 生田キャンパスで スポーツの未来をメダリストが語る

リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックの興奮冷めやらぬ10月27日(木)、専修大学スポーツ研究所の公開シンポジウムが生田キャンパスで開催された。オリンピック女子レスリング金メダリストの伊調馨選手、パラリンピック走り幅跳び銀メダリストの山本篤選手、ソウル五輪100m背泳ぎ金メダリストの鈴木大地スポーツ庁長官、ロス五輪レスリング出場の馳浩前文部科学大臣(S59文卒)、ソウル五輪レスリング金メダリストの佐藤満経営学部教授といった錚々たるメンバーが集い、スポーツの未来を語り合った。600人収容の10号館大教室は立ち見が出るほど盛況だった。

リオ五輪で4個目の金メダルを獲得し、国民栄誉賞を受賞した女子レスリングの伊調選手をはじめとした、オリンピック・パラリンピックのメダリストたちが次々に登場すると、生田キャンパス10号館の大教室は歓声に包まれた。スポーツを学問として捉え、トップアスリートの育成・支援、社会貢献を目的として活動する専修大学スポーツ研究所による9回目のシンポジウムは、豪華なゲストを迎えて行われた。シンポジウムのテーマは、「オリンピック・パラリンピックは何を残すか」。伊調選手、山本選

手はアスリートの立場から、鈴木スポーツ庁長官は行政の、馳前文部科学大臣は政治家の立場から意見を交わした。

伊調選手はリオ大会を振り返り「体調が悪いとも、緊張しているとも思っていなかったが、気づかなかっただけで体は重圧を感じていた。実力を出し切れず、点数をつけるなら5点」。それを受け、司会の佐藤教授が「私はソウル五輪のとき、100点満点で金メダル。5点で金メダルとはさすが4連覇する選手は違う」と返すと、会場に笑いが起きた。



司会 佐藤 満 経営学部教授

馳 浩 前文部科学大臣

指導者は運動生理学、心理学、栄養学などの学術的なバックボーンをもって選手の指導に当たってほしい。そういう人材育成の場は、大学にある。コーチはかつてボランティアだったが、プロフェッショナルとして選手の指導に当たれるシステムを作っていかなければいけないし、そのためには財源が必要。それは政治の問題でもある。



北京から3大会連続してパラリンピックに出場した山本選手は、肌で感じたパラリンピックの盛り上がり語る。「東京大会に向けて、パラリンピックのテレビ放送も増えた。ネットでもライブで観られるようになってきているし、観客も増えている」。

平成26年度からパラリンピックをはじめとした障害者スポーツ事業が、厚労省から文科省に移管された。馳前文科相はこのことに触れ、「オリンピック・パラリンピック分け隔てなく支援する」と。鈴木スポーツ庁長官はパラリンピックの競技のレベルが上がっていることを指摘。「各国が力を入れてきた。コー

チの能力が上がらないと、日本人の活躍が難しくなる。健常者に対しても障害者に対しても、コーチングできる能力のある指導者の育成を進めていきたい」と語った。

馳前文科相は伊調選手に「身に付けた技術を生かし、いかにレスリングに恩返しするかを考えて、指導者としてのトレーニングもしていただきたい。そのために大学を活用してもらいたい」と要望。佐藤教授が「専修大学で指導するのはどう？」と水を向けると、伊調選手は「もちろん可能性はある」と答え、会場からは拍手が起こった。

大学のスポーツ改革を進めている。アメリカのNCAA(全米大学体育協会)に倣い、大学スポーツで得た収益を大学を含めた施設に充てる。スポーツ人口を増やし、スポーツ産業の拡大につなげ、スポーツ界を大きくすることを考えている。

選手としてレスリングを追求してきたが、今日、皆さんの話を聞いて、自分がいかに狭い世界にいたのかということを実感。私も32歳です。レスリングだけでは行き詰まってしまうので、勉強しながら、選手を続けるかを含めて将来について考えたい。

東京パラリンピックまでの4年間をどう過ごすかが大事。もう34歳なので、けがのないように体のケアをしながら、記録を伸ばしたい。僕は道具を使って競技をしている。義足の開発とともに記録も伸びているので、日本企業でも開発が進んでいけばいいと思う。



鈴木大地 スポーツ庁長官



伊調 馨 選手



山本 篤 選手